



巻頭言

縄文・千枚田

財団法人 日本植物調節剤研究協会 理事
保土谷化学工業株式会社 農薬営業部長

有澤成治

縄文文化に関する新知見が相次いでいる。縄文人が航海を得意とし、日本海を湖のごとく自由に交易していたなどと想像もしていなかった。栽培文化については三内丸山遺跡の「粟」の可能性あたりから「何が発見されても驚かない」と心していた。しかし先頃の六千年前に陸稲作が岡山で行われていたとの報道には驚いた。弥生文化の特徴を改めて「低湿地帯での大規模水稻作」と確認すれば、縄文の栽培文化を照葉樹林文化に一般的な多様な畑作物の混然とした栽培として想定するのは説得力がある。

「江戸時代には石高が藩経済力を表現する日本標準だった。各藩は不適地にも稲作を押しつけ参勤交代の費用捻出の為に苛斂誅求を実施した。結果として東北農民は冷害に苦しんだ」との歴史叙述が最近は目に付くようになった。しかし、冷害に強い作物が水稻であって、この選択は五千年前の寒冷化・三内丸山の放棄とを乗り越える日本人の知恵だったのではとも思う。今年は米の輸入関税化に対応して減反の目標値の設定が全国一律でなくなった。これと連動した「転作の勧め」の歴史的背景として「過去に切り捨てられた畑作の多様性」強調がマスコミ操作され出したか、とほうがっているか。

減反率を一律にしてきたことは、水稻を単なる商品作物とせず、至高の生産システムとする多くの人々の認識と努力が背景にあった事だろう。天に届くような棚田が東南アジアで世界遺産に登録されたり、日本でも先人の美談として千枚田が語り継がれ「日本の原風景」としても

定着した。水田固有の生態系について見事な映像レポートも流されだした。

「日本は最近まで石高制に縛られていた。もっと多様な耕作を選択して食糧自給率を高めよう」という声と「日本の原風景・生態系を維持しよう」とが心の中で葛藤している。

昨今では農地の流動化・法人経営への法規対応が論議され始めている。農地解放による自作農化とその兼業化した農地所有形態は、必要とされる農地再編・大規模耕作に対応できないでいる。米輸入関税化は変化に対応する為の最後の時間稼ぎなのか。当社にとっては30年来の夢の技術である水稻直播の踊り場でもある。本誌前月号の巻頭叱咤が身に滲みた。

想像の先は再編対象にならない山間農地の行く末である。過疎の山間地で生を終えようと決意した独居老人の生活が繰り返され報道される。

「森の生活」を望む脱都会組の眼鏡に叶って放棄農地が復活するのは希で、ほとんどが荒廃へと辿ることだろう。農地が、自給自足の為でなく商品生産を目的としてその価値を再評価されるのは経済原理として認識すべきだろう。縄文人を越えて近世の人々が広げてきた列島空間を近代人は放棄し始めた。放棄された農地は森林に返るだろう。それも良いかも知れない。

救いの想像もしている。小さな谷合いの桃源郷のような生活空間が再構築され新首都圏を取り巻いている住空間である。「情報」の交通が便利になり、「人」の交通が抑制された穏やかで水と緑に近接した職空間である。